

授業討論（探究共同体）

この活動では、授業当日に学生が選んだ哲学的な問いについて、クラス全体で討論を行う。問いの内容は基本上どのようなものでもよいが、授業内容と何らかの関連を持っている必要がある。ただし、問いを提案したり投票したりする際には、その問いが授業討論の中で実りある形で展開できるものかどうかを、慎重に考える必要がある。

経験的問題——つまり、観察や実験によって検証可能な事実や証拠に関わる問い——は、授業討論の中では深く議論することが難しい場合がある。というのも、経験的証拠そのものについて意見が分かれることもあれば、その解釈をめぐって対立が生じることもあるからである。

こうした問いをさらに深く検討するためには、追加の情報を得たり、さらなる実験を行ったりする必要があることが多い。しかし、そのようなことは、通常の授業環境では一般的に不可能である。

これに対して、もし問いが哲学的なものであり、経験的事実ではなく、抽象的な概念や論証の検討を中心とするものであれば、授業の中でも議論を深めることが可能になることが多い。その際には、批判的思考、論理的推論、論証分析といった哲学の道具を用いることになる。

これらの討論への参加は、この授業においても、学生の学習においても中心的な意味を持っている。

討論は学生主導で進められ、教員はクラスの一参加者として加わる。どの問いを扱うかについて、教員が介入することはない。どの問いを選ぶかは、完全に学生たち自身が決めることである。通常は、一回の授業で二つの問いを扱い、前半と後半で一つずつ議論する。

共同体のルール

討論をより充実したものにするために、私たちは、批判的思考・協働的探究・推論能力の発展を重視する方法を用いる。この方法では、開かれた問いを提示し、学生が自分自身や他者の考えを振り返ることを促し、複数の視点を探究していく。また、自分の考えを明確に表現すること、そして他者の考えに注意深く耳を傾けることも重視される。

討論の際に重要なのは、哲学における議論や討論の目的は「勝つこと」ではない、という点である。その目的は、異なる考え方を、敬意と開かれた姿勢をもって探究し、検討することにある。

実りある哲学的討論のためには、参加者が自分自身の考えや立場を持って議論に参加すること、そして他者の考えにも耳を傾け、真剣に検討する姿勢を持つことが必要である。また、異なる立場を尊重し、建設的な対話に参加しようとする姿勢も求められる。